

開かれた社会へ

最近、久しぶりに会った学生時代の友人数人とじっくり話をする機会があったが、そこでは、年金、医療、道路、特別会計など行政への批判から、耐震偽装や食品偽装など民間企業に対する不信に話題が集中した。「どうして日本はこんな社会になったのか？」といふばかり、嘆くことしきりだった。これに加えて、原油や穀物の価格高騰という以前には考えられなかったような事態が現出しているし、サブプライム問題に端を発する世界の経済金融も先行き不透明感が増している。地球環境問題も待ったなしの状況だ。そして、これら山積する難題に十分対処しきれていない日本社会に、ある種の閉塞感を感じるということでは全員の意見が一致した。友人の一人は「日本は演歌型の社会だ」と言う。彼は、日本の社会に渦巻く不信感の連鎖は、「癒着」「談合」「隠蔽」といった言葉に表されるような「仲間内」の便宜を図る「内向き社会」から抜けきれないことが原因だと言う。仲間や身内を思いやる気持ちは強いが、自分自身が社会を形成する一員であり当事者だとの認識が乏しい。自らの仕事が社会にどういう影響を与えるかとか、社会のなかで自分たちがどういう役割を担っていくべきか、といった発想が欠落していると言うのである。そう言えば、社会の厳しさ、悲しさ、はかなさを切々と歌い、変わらぬ固い結束を誓うといった演歌特有のムードのなかには「情」はあっても「公」とか「理性」といったものは感じられない。閉塞感漂う日本社会の姿と演歌とは確かによく似ていると感じ入った次第だ。

しかし、今やかけがえのない地球環境を守り、そこに生きる多様な生物を守り、様々な民族や国家と平和に共存・共生することが求められている。また、バリアフリーやノーマライゼーションという言葉に表されるように、高齢者や体に障害のある人などが一般の人と支障なく同じ生活区域で活動できるような社会環境整備も期待されている。拡大する格差社会の是正も急務であり、若年労働者が夢を持てるような社会を築くことも課題となっている。そこに共通するキーワードは共存・共生である。友人のたとえになぞらえれば、世界のあらゆる人々との連帯と共生をめざす「オーケストラ型の社会」に変身していくことが日本社会に求められているのではないか。

戦後は、産業復興と生活水準の向上が国家の目標だった。物質的な充足を優先した時代にはうまく機能した行政と産業界との連携も今や限界を示している。これからは消費者たる個人としての国民生活に軸足を置いた行政の采配が求められ、産業界も利用者の立場に立った財サービスの提供が大切であり、それは使命でもある。また、個人も現在の豊かさの質を見直すことが必要だ。生活習慣病を引き起こすような、環境負荷の高い、利便性に過度に依存したライフスタイルは好ましいものではないだろう。そして、何よりも個人が組織に埋没せず、自立した個人としてそれぞれの現場で高い意識を持って仕事に取り組むことが大切だ。我々、協同組合組織の活動に境界はない。「一人は万人のために、万人は一人のために」。協同組合組織の強みを大いに発揮したい。

((株)農林中金総合研究所 取締役企画総務部長 都 俊生・みやことしお)